



琉球玩具 通信



No. 3

2025.07.25.

琉球玩具に関する情報交換と記録の広場

目次

- 風船で遊ぶ.....当山昌直.....1
- 「動く張り子」の作り方③.....與儀誠一.....2
- 子どもの頃の遊びの思い出.....竹盛洋一.....4
- リーフクラフトを八重山の新しい文化に！③
- トントミーの編み方.....5
- 身近な植物で草玩具を作って遊ぼう②.....西平守孝.....7

風船で遊ぶ

当山 昌直

琉球弧の島々で聞き取りをしていると、植物でつくった風船で遊んだ、という話がよく出てきます。材料は海岸近くに生育するハマオモトです。風船をつくったという話は、奄美・沖縄・宮古・八重山諸島の各地にあるようです。作り方を喜界島志戸桶に住む南さんに教えてもらいました。

まず、よく成長したハマオモトを使います。茎が長いのがよいです。根元付近から切って、なるべく長くなるように上の方も切り取ります。筒状になった茎を、足で踏みながらゴロゴロと転がします。そうすると、茎を包んでいる薄い皮がほどけるようにして剥がれていきます。薄い膜のような皮だと軽くて良い風船ができますが、あまり薄くやろうとして空気が漏れてしまえば、元も子もありません。コツがあるようです。風船づくりは、この薄い皮をうまく剥がすのがミソです。円筒状になった茎の薄い皮の片方を結んで、反対側から息を吹き込んで膨らませ、そのあと吹き込み口を縛ったら完成です。お手玉のように、ポンポンと飛ばして遊んだそうです。

ハマオモトは、宮古では、サディフ、ピーングなどと一般的に呼ばれています。風船は、畑のものは土がかたいから(良い)風船はできない。砂地のある海岸にはよくあったので、おみやげに持ち帰った、といいます。どうやら砂地のハマオモトが風船に良いようです。また、宮古では魔除けとして利用されています。屋敷の四隅に植えられているのを見かけますが、魔除けとは気がつかないで素通りそうです。また、同じく宮古では畑の四隅にも作物を守る魔除け、または印として意図的に植えられているようです。

宮古で聞き取り調査をしていたら、おばあちゃんが子供の頃を思い出しながら話していました。「昔は屋敷の隅に魔除けとして植えていましたよ。大きかったんで、これで風船をつくって遊んださー。そしたら、親にしたたか叱られた」と。



海岸近くに生育するハマオモト (2019年池間島)



喜界島志戸桶の南さんに直接教えてもらいました(2018年)



ハマオモトの茎を足でゴロゴロと転がします(2018年)



しばらくして、皮がほどけてきます(2018年)



もっと薄い皮にします(2018年)



屋敷の周りにあるハマオモト (2015年池間島)



畑の隅に植えられたハマオモト (2019年宮古島)

とうやままさなお
那覇市市銘苅在住

これまで2回にわたって、琉球張り子を動かす方法について紹介しましたが、今回もその続きとしてまず① 今までとは異なる張り子の動かし方を紹介し、ついで② 張り子と他の画像を組み合わせる遊び方を紹介したいと思います。興味のある方は、どうぞ試してみてください。ここで使った張り子は全て自作の張り子です。

1) 張り子を動かす

琉球張り子の下部にマグネットを取り付け、張り子を置いた台座の下に別のマグネットを仕込んで、台座に載せた張り子を動かしてみましょう。図1に示すように、台座の下で回転する円筒または円盤にマグネットを付けて回転させれば、台座の上に置いた張り子に付けたマグネットが反応して、張り子を動かすという仕掛けを使います。身近にあるもので、自動で回転する装置を作ってみました(図2)。

市販の商品展示のターンテーブル(図3)はトルクは小さいのですが、長時間張り子を動かすことができます。

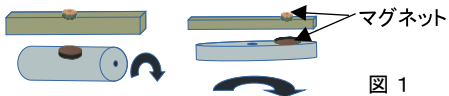


図 1



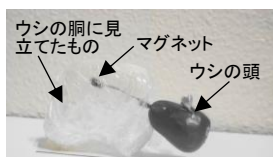
図 2 台座の下と台座の様子



図 3 市販の回転盤

① 張り子を動かす

張り子のウシの頭部から胴体の中に延びる針金にマグネットを取り付け、張り子を置いた台座の下に別のマグネットを仕込んで、台座の上に置いた張り子を動かしてみましょう。手持ちの張り子でチャレンジしてみましょう。



ウシの頭から延びる針金にマグネットを取り付ける(→)



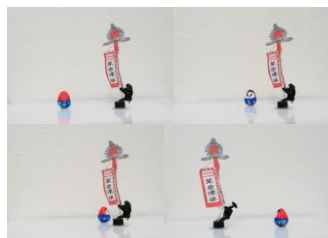
台座の下の回転盤の動きに反応して、牛は首を上げ下げする

② ウッチリクブサーと旗頭グワー

ウッチリクブサーや旗頭グワーの底に鉄製のワッシャーを付け、ターンテーブルに2個のマグネットをつけることで面白い動きをさせることができます。



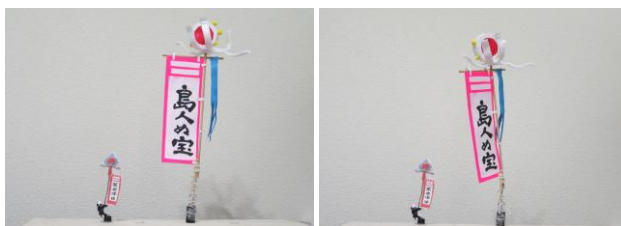
動くウッチリクブサー



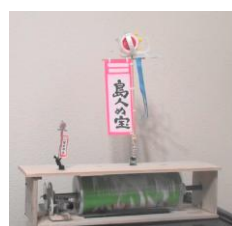
動く旗頭グワー

③ 旗頭グワー

図2に示す円筒が回転する部品を用いると、旗ガシラグワーを上下に動かすことができます。



上下に動く旗頭グワー



旗頭グワーと回転装置

④ ウッチリクブサー

玩具に直線的な動きをさせるには図2の装置で、より長いネジを用いた装置を作って使います。電池の極性を変えれば、ウッチリクブサーを前後に動かすことができるでしょう。



図2の装置でより長いネジを使う

2) パソコンを用いて張り子で遊ぶ

琉球張り子を動かして撮影した画像や動画を好みの画像と組み合わせると、より楽しい動画を作ることができます。いろいろ試して遊んでみましょう。張り子は全て自作のもので、組み合わせた動画も①と③は自分で撮ったものを使い、④は使用フリーの動画と組み合わせたものです。

① 鯉乗り童子を動画に組み入れる

鯉乗り童子の張り子を動画に組み入れて、楽しい動画を作ることができます。



② 振動で動くトラの動画をカラーシフト

張り子を動かして撮影した画像や動画をカラーシフトして色を変えて遊ぶこともできます。



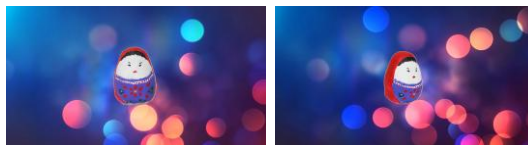
③ カロウビンガと画像の組み合わせ

張り子を動かして撮影した画像や動画をバックにして、好みの画像と組み合わせると、楽しい動画を作ることができます。カロウビンガとハイビスカスの画像を組み合わせると、作ってみたものです。



④ ウッチリクブサーを動画に挿入

ウッチリクブサーを動かして撮影した画像を、好みの動画に挿入すると、楽しい動画を作ることができます。



よぎ せいいち
那覇市首里崎山町在住

昔のことですが、子どもの頃にいろいろな遊びをして遅くなるまで遊んだものでした。何人かで遊ぶゲームの中には、陣取り合戦のような遊びもあり、「島とり」と呼んでいたその遊びを思い出します。今ではそのような遊びをすることも達はあまり見られなくなりましたが、その大まかな内容を図とともに書いてみましょう。

「島とり」遊び (陣地取り)

地面にまるで囲んだ領域の中で、遊びに参加する人数分の「島」を設定し、そこから領域内に島を拡大することによって広い面積を自分の島にする遊びです。

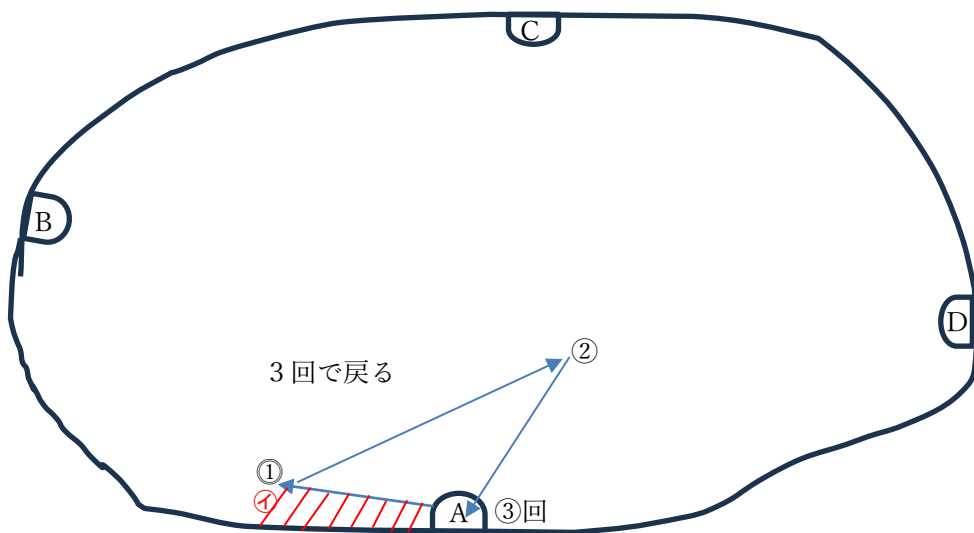
① 遊びの内容

地面に線をひいて丸く囲んだ範囲の中で、自分の島から自作のおはじきのようなもの*を指ではじき、3回目で自分の島に戻ることができれば、その軌跡で囲まれた部分が自分の島となる。大きな島を取るためには、遠くに飛ばすことになるが、戻るのがむづかしくなり、自分の島に戻れなくなる可能性が大きくなる。試行は失敗したところで交代し、最終的に一番大きな島を確保したものが1位となるという簡単な決まりで遊ぶ。

*当時は、ビンやガラスの割れたものをコンクリートなどで擦って鋭角な角を取り、100円玉くらいの大きさにして「マイおはじき」を作った。そのおはじきを「ジョンギ」と呼んだ(その呼び名が、定規=「じょうぎ」から来ているのかどうかは定かではない)。

② 大まかな遊び方の手順

- ① 適当な裸地(砂地ではなく、割と固い地面)に遊びに適した範囲を線で描く。その範囲の形は、円・楕円・四角や歪んだ形など、どのようなものでもよい
 - ② 囲みの大きさによって参加員数を決める(あるいは、参加者の数によって大きさを決める)
 - ③ 自分の島を決めるのは、外周の線上に親指を置いて弧を描く。中指のラインで示された範囲を自分の島とする
 - ④ じゃんけんで順番を決め、ゲームを始める
 - ⑤ 自分の島内にジョンギを置いて目指す「島とり」のラインを読み、ジョンギを指ではじいて3回目で島に戻る。はじくごとに線を引いていき、3回目にうまく島に戻ること失敗したら、島は取れなくなるため線を消す
 - ⑥ 自分の島に戻ること失敗すれば、次の人の順番となり、その人がジョンギをはじいてゲームを始める
 - ⑦ 自分の島にうまく戻ることができれば、自分の手のひらを広げて(親指から中指か薬指)の届く範囲(指尺)で線を引くことができ(赤線)、その範囲まで島を広げる。3回で成功したかどうかにかかわらず、試技が終われば次の人に代わる。成功すれば、赤線の部分(指尺)で届く範囲④で線を引けば陣地が増える(赤斜線部分)
 - ⑧ 獲得した島の大きさによって順位を決め、一番大きな島を得た者が1位となる
- ・現在なら、例えば体育館の床を使ってチョークでラインを引けば、同じような遊びができるでしょう。ジョンギはペットボトルの蓋などで代用できるので工夫次第



※自分の島の A からおはじきを弾き飛ばし、①②③と3回で自分の島に戻る。③がうまく成功すれば、図の①②③で囲まれた部分が自分の島となる。次は右側を狙うが、先にDに取られる可能性があるため、作戦が必要になる。

たけもり よういち
竹富町大富在住

先日、潮の引いたアンパルのマングローブ干潟で小学生達と自然観察をしていた時、「干潟にもカエルがいるんですか？」と、面白い質問をした子がいました。干潟をピョンピョン飛び跳ねて逃げるのはトントンミー(ミナミトビハゼ)です。時には水切りの達人のように川面を飛び跳ね、向こう岸まで渡ってしまうこともあります。

今回は、尻尾と胸鰭をうまく使い、全身のバネを効かせてカエルのように干潟を飛び跳ねる、トントンミーを編んでみましょう。伝統的な草編みバツタの編み方を改良して、いろいろな動物を編めるようになってきたリーフクラフトですが、カマキリやセミ、トリケラトプスといった特徴的ですが非常に複雑な形の動物を「らしく編もう」とすると、編み方も極めて複雑になり、一つ編み上げるのに一時間もかかるようになってしまいました。これでは、文化として定着させることはできないのではないかと考え、たどり着いたのがシンプルなフォルムのトントンミーです。

編み方を極限まで簡単にして見る人の想像力に手伝ってもらい、誰が見てもトントンミーらしく仕上げることができました。ヤエヤマヤシの1枚の小葉から、1尾のトントンミーを編んでみましょう。

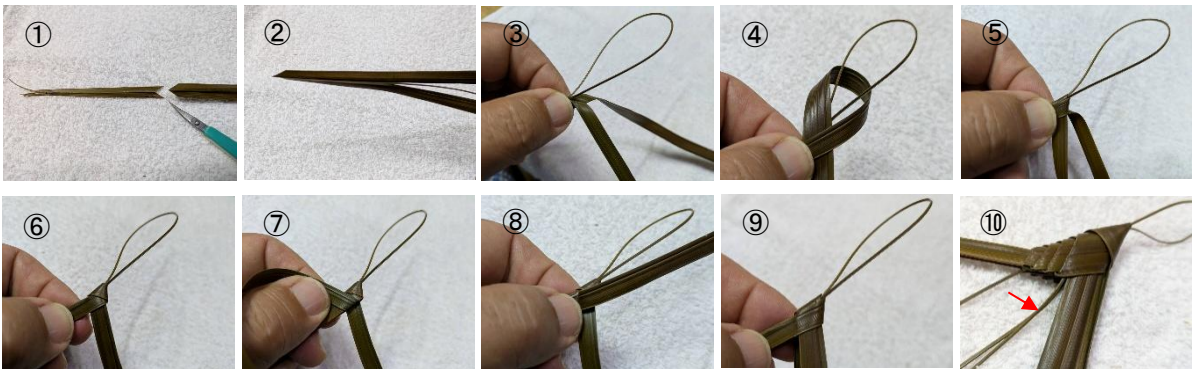
トントンミーの編み方

マングローブ干潟の木陰で、ぴよんぴよんと飛び跳ねている小さな魚がトントンミーです。かわいいしぐさを見せるトントンミーを編んでみましょう。

① しっぽの方から胴体を編む

編み方はバツタの編み方をいづらか変えた編み方で、途中まではバツタと同じように編みます。

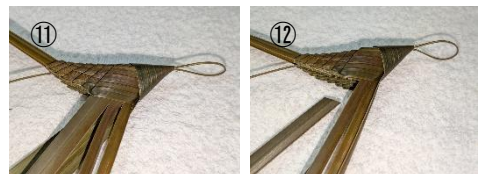
- 1 小葉の葉先の傷んでいるところは斜めに切り落として尻尾を尖らせませす(①)。
- 2 尻尾の長さは6cmもあれば充分ですから、そこから葉の付け根までは真ん中の軸の両サイドにカッターナイフでスリットを入れ、爪楊枝か指で裂いて軸と2枚の帯にします(②)。
- 3 軸を曲げて葉の裏側に挟むように左手で持ち編み始めます(③)。
- 4 右側の帯を内側に捻って環にして軸の環に被せ、後方斜め下に引いて三角の折り目を作ります(④⑤)。
- 5 右手に持ち替え、左側の帯も同様に捻って被せて斜め下に引くと、胴体を編む土台の完成です(⑥)。
- 6 左手に持ち替え、右側の帯を後方斜め上に折り上げて折り目をしっかり付けます。次に今度は水平方向前方に折り、それにも斜めの折り目をしっかり付けます(⑦⑧)。
- 7 この帯を内側に曲げ、ひねって環を作り、軸の環に被せて斜め下後方に引いて、しっかり締めます(⑨)。
- 8 右手に持ち替え、左側の帯も同様に編めば一段目の完成です。
- 9 同様に右左交互に3~4段まで編み進め、帯の外側の端の硬い筋を切除し(⑩の→)、帯の残りが30cm以下になるまで編み進めます(このように途中で帯の端を切除しないと胴体が太くなりすぎてしまいます)。



② 頭と胸鰭を編む準備

胴に当たる部分を編み終えた後に、頭と胸鰭を編み足せるように準備をしましょう。

- 10 左右の帯の幅を三等分し、一番後側の1/3は切除します(⑪⑫)。残りの2枚を、前から1番・2番と呼ぶことにします。(帯の幅が広すぎる場合や傷がある場合は幅5mmの帯を左右2本ずつ取れるように裂いて余分は切除します)



③ 頭を編む

トントンミーの頭の部分を編みます。ポイントは大きな目です。

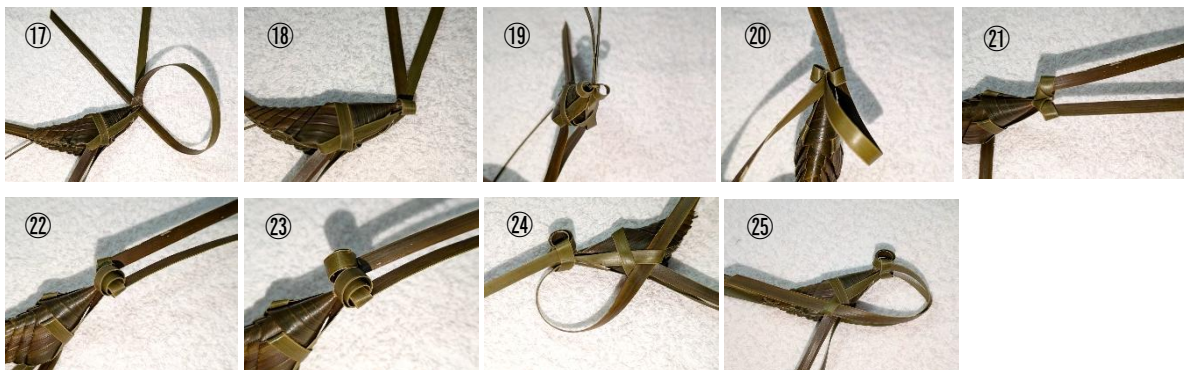
- 11 1番を上折り上げ、肩口から下に通して付け根の後ろ側に出し、引き締めます。次に1番の先を斜め上前方に折り上げますが、まず体側の1番の帯をすくってから軸の環を通し、内側に捻って引き上げます(左右の1番を同じように編んだら、軸を後ろに引いて環をすぼめます)(13~16)。



- 12 右1番の帯を外側に回してもう一度下から上へ通し、できた帯の環に後ろから前へ2回回すと右目ができます(17~22)。

- 13 左1番も同じように編んで左目を作ります(23)。

- 14 右1番を左の脇に通し、左1番は右の脇に通します(24~25)。



④ 胸鰭を編む

顔の下左右に大きく伸びた胸鰭を編みます。

- 15 右2番を上折り上げ肩口から下に通し、付け根の前側に引き出します(26~27)。

- 16 右2番を今出てきたところの内側に挿し込み、ループ状の胸鰭を作ります(胸鰭の表情を決めるだじな工程ですから写真を参考に丁寧に編んで下さい)(28)。

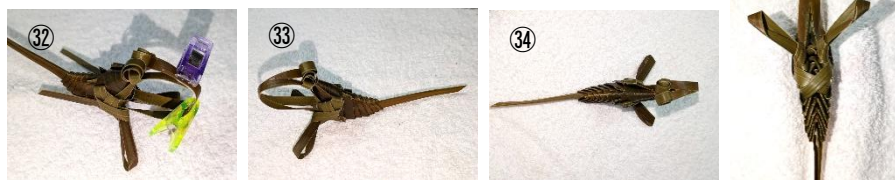
- 17 肩口から出た右2番を外に曲げ、胸鰭の脇の下を後ろから前へ回し、更に体側で帯を3枚すくって前へ、すぐに折り返して今度は1枚すくって右脇の下へ編みます(29~30)。2番の長さにゆとりがあれば腹側を回して左側の前から2番目の節に下から通して収めます(31)。



⑤ 仕上げ

いよいよ仕上げです。

- 18 両目玉の大きさを揃え、鼻先の位置を揃えたら木工ボンドで左右の1番を鼻先で重ねてクリップで留め、脇に通したところにも爪楊枝で木工ボンドを押し込んで余分な帯を切除します。これで、トントンミーの完成です(32~35)。



たにぎき しげお
石垣市宇新川在住

「ままごと」はこどもの頃の懐かしい遊びで、特に女の子が好んでする遊びでした。そこではお店ごっこなどもあって、子供たちはお金を作ってそれでおもちゃの食べ物などをしていたものです。おもちゃのお金として、2つのことが思い出されます。一つは、イチユビの果実の莢から残っている種子を取り出し、いくつかの莢を次々と繋いで環にして硬貨を作ったり、セイロンベンケイなど肉厚の葉を円く切り抜いて(ポンチで打ち抜いてもよい)、硬貨を作ったりしたものです。こどもの頃のままごと遊びを思い出して、作ってみましょう。お札には、切口などから樹液の出ない葉を使うとよいでしょう。

1) イチユビ

イチユビは黄色い花をつける背の低い草で、実は種が詰まったたくさんの莢が果柄の先端にきれいに並んで付いています。果実が熟して種が飛んだ後に、からからに乾いた莢をとって、基部を先端の開き口に挿し込んで、円くつなぎ合わせて硬貨を作ることができます。4個を繋いだり、5個や6個とつなぎ合わせることで、さまざまな穴あき硬貨を作るとよいでしょう。



果実



莢4個の硬貨



莢5個の硬貨



莢6個の硬貨

いくつかの莢で作った硬貨かによって、硬貨としての価値を変えてもよい



莢



種子

2) セイロンベンケイ

セイロンベンケイは、いろいろな場所に生えている葉が肉厚の植物で、花序が高く伸びてたくさんの花が下向きにぶら下がるようにつきます。葉の縁の切れ込みから不定芽を成長させます。葉から芽が出る性質からハカラム(葉から芽)と呼ばれることもあるそうです。葉は落下しても芽吹いた不定芽が元になって、それらが生長して育っていきます。

葉は肉厚で、かじると幾分酸っぱい味がしますが、ハサミで円く切ったり、適当な大きさのポンチを打ち込んで円く切り取ったりして、おもちゃの硬貨を作ることができます。このようにして作ったおもちゃのお金を、お店ごっこをして遊ぶ際に使えるでしょう。



セイロンベンケイの葉



葉を切り抜いて作ったおもちゃの硬貨

3) いろいろな葉

いろいろな植物の葉を使ってままごと遊びの「お札」として使います。昔ばなしに出てくるお札と同じです。傷をつけても樹液が出ない葉を選ぶことが大切です。樹液がたくさん出るような葉は、手にべたべた着いたりして、お札として使うことは避けた方がよいでしょう。中には樹液が手に付くとかゆくなるような植物もありますので、気を付けたいものです。落葉の用に、葉が古くなれば樹液が少なくなることもありますので、お札にする葉には葉の新旧も考えておくとよいでしょう。

バラなどの葉は、樹液が出ることはまずありませんので、葉全体をそのままでお札として使うか、ハサミで四角に切って使うとよいでしょう。



葉の形のままお札



四角く切ってお札

私が子ども頃はそれといったおもちゃがすぐ手に入るものではなかったため、身近な植物の花や葉、実や種子などをを使ってさまざまな玩具を作って遊ぶのは、ごく普通のことでした。今では、何でもすぐに手に入れることができるようになり、自分で作ったおもちゃで遊ぶことが少なくなったような気がします。手作り玩具で遊ぶことを、単なる昔を想い出すためというにとどめず、新たな玩具素材を探すことにつながると考えれば、この先の世界でも役に立つことがあるかも知れません。何かに使えるものはないか探し出し、考えてみましょう。

4) ソテツ

ソテツは裸子植物の仲間で、沖縄では自然地に群落を作っているものも多いのですが、庭木として植えられているものも多く、街路樹にも使われています。中には、天然記念物に指定された銘木もあります。古くから、生活の道具としてさまざまな民具が作られていましたし、食糧難の際には種子や幹を適切に毒抜きして食用にされ、多くの人たちの命をつないだ大切な植物でもあったとのこと。

沖縄の多くの草玩具の中では、ソテツの葉でつくる虫かごは定番中の定番で、他にも種子を使ったさまざまな玩具などを挙げることができ、ソテツはとても馴染み深い植物です。ここでは、いわゆる伝統的な伝承玩具以外に、どのような玩具が作れそうかを考えてみることにしましょう。

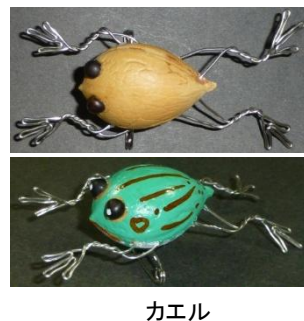
① 葉を使って作る

ソテツの葉は複葉で、中肋の左右に先端に棘を持った小葉が多数付いています。玩具作りの際に、不用意に扱って刺されないように気を付けましょう。葉で作られる玩具の筆頭は、何といても虫かごでしょう。上手に編めば美しさからいっても機能からいっても申し分ない沖縄の草玩具で一番といってもよいのではないのでしょうか。誰でも編むことのできる虫かごはさておき、ここでは葉を使う別の玩具などにチャレンジしてみましょう。



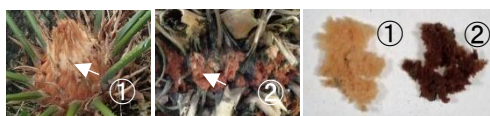
② 種子で作る

ソテツは雌株と雄株が別々の雌雄異株の植物です。季節になれば、雄株には円柱状の雄花が付き、雌株には饅頭状にいくつもの孢子葉がまとまった肌色の雌花が付きます。雌花に直接つく種子は裸のまま、オレンジ色の種皮を被って色鮮やかになります。この通信のNo. 2には、上運天賢盛さんがいくつか紹介していますし、当山さんが手まりについて書いています。それら以外にも、さまざまな玩具を作ることができるでしょう。ここでは、そのような草玩具を作ってみましょう。



③ 鱗片を使って作る

ソテツの花や若芽は綿(鱗片)に被われ、幹の葉の付け根もフワフワした綿が付いています。昔は各地でそれらを集め、琉球手まりの芯などとして使用されたようですが、いまではシュレッダーで切った紙屑が使われるようになりました。綿をマリが作れるほど大量に集めるのは手間がかかって大変ですが、少しずつ集めてたまったところでマリ芯に使うのも、風情があってよいかもしれません。詳しくは西平(2024)や当山(2025)を参照してください。



ソテツの頂端部の芽の淡褐色の綿(①) 幹の部分に残った黒褐色の綿(②) ソテツの綿①と②は色が異なる

下から見たところ



緑の六角の内側に赤で2巻きし、菊花模様を刺繍する

真上から見たところ



黒の区画を異なる模様で埋めたもの

横から見たところ



完成

ソテツの鱗片の芯

ポリ袋に詰めて丸める



黒のミシン糸で巻いて真球になるように仕上げる

にしひらもりたか 那覇市首里石嶺町在住